

ほなひ歴史通信

第114号

2025(令和7).3.1

新生大子町、発足から七十年を迎えて

―保内郷一円合併に向けたある村長のこだわり―

昭和三〇年（一九五五）三月三十一日、一町八か村が合併して新生大子町が発足した。人口規模では県内五番目（四万三八三〇人）、行政区域の広さでは県内一の自治体の誕生である。三月末で七十年目を迎えるのを機に、本誌は来し方行く末を考える一助として、合併時を振り返る小特集を組んだ。ご覧いただければ、と思う。

さて、二転三転した合併の経緯については次頁からの神長さんのエッセーに譲るとして、本欄では当初から保内郷一円合併を唱え、その牽引者となった上小川村長宮田篤三郎に注目してみたい。

明治二四年三月、佐原村初代村長を務めていた神永秀介の三男として生を受けた。神永は、村会議員、郡会議員、県会議員等を歴任し、村行政のみならず保内郷地方や久慈郡といった広域行政の面でも大きな足跡を残した人物である。例えば、菊池武保（大子町）、櫻岡敏（袋田村）と共に「保内郷三傑」の一人に並び称され、また大正八年には「保内地方における産業奨励及教育振興に多年尽瘁した」「保内功労者」として保内郷の全町村長連名で感謝状が贈られている『大子地域の旧町村長事績集』。子供時代から、こうした父の広域的な活躍ぶりを目の当たりにしていたに違いない。

大正二年三月に東北帝国大学農科大学（現北海道大学）を卒業し

て帰郷し、やがて上小川村の宮田家に養子縁組が決まり宮田姓を名乗るようになる。同六年の村会議員当選を皮切りに、父親同様に郡会議員、県会議員として活躍の場を広げていった。県会議員の時代には、「天賦の弁力あり、壇に立つや、雄勁の論議必ず人を魅するものあり」（『イハラキ時事』昭和六年四月号）、と評された。

その宮田が合併問題に直面したのは、昭和二七年四月からの上小川村長七期目の時である。県が示した合併案は、保内郷十町村を三分割する案であった。その方向で議論が進もうとした時、唯一それに異を唱えたのが宮田村長である。三分割案は将来を見通さない近視眼的発想だとして批判し、「わが保内郷は経済的に人のつながりに、風習伝統から見ても一つにまとまるということが最も理想で」とあるとして保内郷一円合併を主張した。こうした父親譲りの広域的、長期的視点からの主張は、雄弁家として鳴らした宮田だけに説得力をもったのかもしれない。町村合併協議会のような公式の場以外でも、宮田村長や村の首脳は精力的に動いた。さらに、宮田個人としても説得に奔走したのではないだろうか。

その効あつて宮田らの主張が受容され、一円合併が実現するかと思われた一歩手前で頓挫の憂き目を見る。だが、その考え方は根強く支持されていた。その後一町五か村合併が先行するが、第二段階として生瀬、上小川、下小川の三村が加わることになる。諸富野村と下小川村の複数の地区が山方町と合併し、完璧な形で保内郷一円とはならなかったが、ほぼそれに近い形で合併が実現した。各首長の思惑が交錯するなか、保内郷一円にこだわった、いわば宮田の執念が実ったともいえるのではないだろうか。

追記 私事ですが、今年度末をもって大子町歴史資料調査研究員を退任いたします。昭和五六年五月、町史編さん専門委員に任命されて以来の、あつという間ですが濃密な四三年間でした。多くの方々との出会いと交流が忘れられません。ありがとうございました。（齋藤典生）

戦時体制下の袋田温泉

―「いはらき」新聞に見る戦争時代の太子(9)―

袋田温泉は、昭和十一年(一九三六)に水浜電車専務の竹内勇之助によつて開発され、県下唯一の温泉として多くの湯治客を集めました。しかし、開発直後の昭和十二年には日中戦争が始まり、袋田温泉の営業も戦争の影響を受けることを余儀なくされます。

袋田温泉の戦争協力は、傷病兵の療養所という形で始まりました。昭和十三年一月に入る頃、竹内勇之助は軍部に対し、袋田温泉の内湯旅館長生閣を戦傷将士の療養所として提供することを申し出ました。同年一月一日付記事によると、「郷土軍将士の療養温泉は長野県下であり、遠隔の不便且設備の点にも遺憾があつたところ、今回袋田温泉が県下唯一の療養温泉として、銃後の御奉公はこの秋とばかり自ら多大なる犠牲を忍び療養所として提供を申出た」(筆者読点加筆、以下引用記事も同じ)とあり、茨城県出身兵の近場の療養所として、袋田温泉が供されました。

戦時色が次第に強まっていくと、徐々に娯楽施設としての温泉に厳しい目が向けられていくことになります。しかし、袋田温泉は「娯楽施設を持たないために却て国民保健の第一線に保健と療養の国策型温泉としてクローズ・アップ」(昭和十五年八月三十一日付)されることになったようで、新緑の時期などには旅館の予約が取れなくなってしまうほどの賑わいを見せました。

こうした中で、戦時中らしい湯治客が袋田温泉を訪れたことが紙面上の話題となっています。「国民精神総動員下の修学旅行は、時局柄勤皇の発祥地水戸の史蹟水戸学の精神を慕つて来県する者頻繁となつたが、袋田温泉は環境も良く、四度の瀧と相俟つて、附近には武田耕雲齋外の勤皇志士の遺跡等隠れたる古蹟、勤皇歴史に富み、非常時温泉旅行地として最適地のため」(同十三年六月七

日付)東京方面を始め、各地からの修学旅行生が集まりました。また、宿泊客ではないものの、霞ヶ浦海軍航空隊の隊員三八〇人が、水郡線を利用して袋田温泉を訪問し、滝見物を行うとともに、温泉につかっています(同年十一月十日付)。

米英開戦前後の頃には、国策への協力が強く叫ばれるようになり、袋田温泉も戦争に協力する姿をはつきりと見せていきます。その一つが、「荒地開墾、空地利用」と「従業員の精神修養と体位向上」の両立を図つて始めた袋田温泉東側空地を利用しての新興農場の開墾(同十六年三月二十三日付、四月十六日付)です。袋田温泉の立原昌業支配人は、「温泉ホテルも新体制下では儲けることばかり考へてはをられません、やつぱり臣道実践で行かねばならない」と語り、花き・蔬菜の栽培に力を入れています。また、戦争の長期化とともに、燃料資源の枯渇が深刻化する中、燃料供出への協力姿勢も見せ、「緊急薪供出の重大性を考慮し、この程温泉でも協力したいと生産した薪材一萬八千俵を率先供出して村人の感激を集めてゐる」(同十九年三月六日付)と話題になっています。

戦争協力が絶対視される中、袋田温泉は積極的に国策に協力する姿勢を示すとともに、勤皇ゆかりの茨城県下唯一の温泉という特性を活かし、営業を軌道に乗せていったのです。(藤井達也)

編集 集 太子町歴史資料調査研究会

編集人 齋藤 典生(太子町歴史資料調査研究員)

藤井 達也(太子町歴史資料調査研究員)

大金 祐介(太子町歴史資料調査研究員)

神長 敏(太子町教育委員会事務局)

大金 真理子(太子町教育委員会事務局)

発行 太子町教育委員会

久慈郡太子町大字池田二六六九番地

0295(72) 1148

発行日 二〇二五年(令和七)三月一日